近江商人の知恵と理念を現代に生かす情報紙

AKINDO委員会

三方よし（さんぽう）

第7号
1997／7

CONTENT

連載　近江商人の健康管理 …… 2～3
近江商人活躍の舞台④ 大陸の近江商人 …… 4～5
近江商人のベンチャービジネス　近江上布 …… 6
書籍紹介／金言名句⑥ …… 7
催し案内／てんびん棒 …… 8

中山道柏原の亀尾左京のシンボル　福助さん

三方よし　「三方よし」は近江商人共通の経営理念。「売手よし　買い手よし、そして世間よし」の精神で地域社会に大きく貢献した。本紙は近江商人を代表する理念を表題としている。

連載

近江商人の健康管理①

近江商人と薬

近江八幡市立資料館
館長　江南（えなみ）　洋（よう）

人誰しも健康である事を願うものである。ましてや働き盛りで、一家の中心となって世間の荒波にもまれる立場の人にあっては、より以上に自らの健康に期待せずにはおられない。

「お元気ですか？」

「お陰様で」とほほえむことの出来る日々であってほしい。

日本全国を股にかけ、天秤棒一本を肩に全国津々浦々で活躍し、例えその偉大さが一時的であったにせよ、日本の経済界に大きな影響を与え、今日なおその名声をほしいままにしている人々、即ち近江商人と呼ばれた人達は、人並み以上に健康に留意したものである。

天秤棒と二人旅

天秤棒とは、元来、近距離の間での輸送道具であり、裏口から表口へ、倉庫から店へと物資の移動に最も利用され、そして人類の歴史と共に生きづいて来た一番簡単で効率的なものである。それなのに、現在では全く目にする事もなく、ある場所でかろうじて見ることが出来る風景となった。うっかりすると天秤棒の存在すら知られない昨今であろう。日本全国を巡った近江商人の先人達は、この天秤棒と共に旅に必要な最小限の身廻り品を托し、時には悪路で傷ついた足の杖がわりとし、又山中での危険な動物との出会いに武器として我が身を守った事であろう。やがて荷車が普及し、船が利用されるようになると、大量の物資が産地より消費地へと運ばれるようになる。その様な時にあっても、近江商人達は全国を旅し色々な情報を集め、需要と供給のバランスを考え、商売の発展を願い、天秤棒との旅は欠く事のできない二人旅であった。

豊富な薬の知識

しかしながら、彼ら商人達がこの天秤棒にすべてを托した事もさることながら、体内から起こる色々な病に対して、携帯薬を飲んで治療したり、山野に自生する薬草類の利用は欠くことの出来ない、俗に云う民間療法はもとより、その効能に対する知識を彼らは充分に会得していたことであろう。幸いにして当時、文化の中心であり、日本の首都であった京都とは歩いて一日の距離であった。商業取引はいうまでもなく、日常生活や芸術、文化等々に至るまであらゆる面での接触があり、果ては親戚関係も生まれ、当然、健康についての保健や薬品等の知識、そして器具のみならず製薬への知識もあった。とくに当時にあっては、東洋医学に対する関心は深く、長崎・堺等を窓口として日本に輸入されてくる、中国・朝鮮半島等の影響は大きく、漢方薬の発達は目ざましいものがあった。山野に自生する薬草、木皮、又は動物、昆虫等の学問的な効能は、彼ら商人にとって欠くべからざる知識であり、商品であったと思われる。

日野正野家の萬病感應丸

製薬と近江の土地柄

一説には、甲賀地方の薬作りの元祖は、甲賀忍者ではなかろうかともいわれているが、漢方薬の発達は近江という土地柄が大きく作用しているのではなかろうか。近江は位置的に見て日本列島の大体中心部にあって、北の方は寒帯地方の、南は温暖地方の生活文化、食文化、宗教文化がそれぞれの影響を受けており、植物学的に見ても北は寒冷植物があり、南は温暖植物があって、丁度近江はその接点となり、両地方の植物の最北限、最南限である。まさに、一年を通じて、春夏秋冬それぞれの気候を万遍なく受け、植物の成育には誠に恵まれた地域でもある。鈴鹿山系はもとより、伊吹山の存在も又、薬草にとっては大切な所で、柏原にある近江商人の一人とし、今日もなお、その足跡をついでおられる「亀屋左京」といわれる伊吹もぐさの本舗がある。

〝ここは江州伊吹の麓、
　亀屋左京の切もぐさ〟

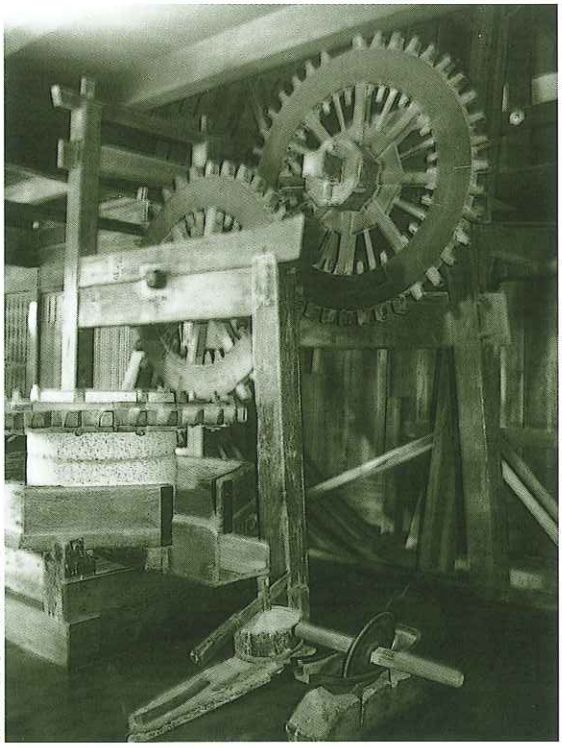
と、今でいうコマーシャルソングを作った商人がいる事は、数多い商人の中では異質な存在である。

又、考古学から見ても、遠く縄文・弥生時代から古墳時代へとその歴史は絶えることなく、連綿として続き、たえず文化の文流は単に国内に止まることなく大陸文化の影響を受け、医薬の面での発達は当然のことと考えられる。又、律令制度の中国、そして信楽宮・大津宮等の中央政府の影響も又、大である。

やがて、近江商人の台頭する江戸期への、長い歴史の積み重ねは否定できない事実であり、ともすれば一般商業のかげにあって、忘れ去られようとしている医薬の歴史も今一度、見つめて見るべきであろう。

伝承される製薬業

ちなみに今日残されている資料の中に、色々な薬品や効能書がある。そのすべてが漢方薬である。速効散、黒丸子、萬金丹、奇応丸、安神散、真実丸、人参等々、余りにも多い品数に驚かされる。勿論、彼ら近江商人が扱った商品の中に漢方薬があったことはいうまでもないが、近江の甲賀・日野地方には、生薬を原料とした漢方薬を作っていた人々があり、全国に販売した商人達があって、今日なお、その技術は伝承され、近代化された製薬会社として多くのメーカーが活躍されている。この事は今日近江地方の地場産業の一つとして評価され、一般製薬のみならず家庭の配置売薬として、富山県地方と並んで産業の一つとし重要な位置づけがなされている。


旧和中散本舗の製薬機械

近江商人活躍の舞台　その④　大陸の近江商人

大陸の近江商人 中江勝治郎と三中井

●同志社大学経済学部教授　末永國紀

中江勝治郎の経歴と三中井創業

第二次大戦前の朝鮮・中国には、三中井という十数の百貨店を展開した企業がありました。三中井の創業者は、滋賀県神崎郡五個荘町金堂出身の近江商人中江勝治郎でした。この三代目中江勝治郎は父、二代目勝治郎と母、とせの長男として明治五（一八七二）年金堂に生まれ、昭和十九（一九四四）年に没しました。三人の弟があり、養子に入った西村久次郎と中江富十郎、中江準五郎です。中江の四兄弟は、事業発展に互いに協力することになります。

生家は中井屋という呉服小物商でした。明治十三（一八八〇）年頃の調査によれば、金堂は付近の村々とともに商家の個数が三〇％を超える、商業の盛んな農村地帯であり、松居久左衛門、外村与左衛門、外村宇兵衛などが居住する著名な近江商人発祥の地の一つでした。

中江勝治郎肖像画（1872～1944）

勝治郎は、現在の五個荘小学校の前身である、弘誓寺のなかに開設された明新小学校を卒業すると同時に、十五歳で呉服卸商見習いのため岐阜県、三重県、愛知県へ持ち下り行商を始めています。明治三十（一八九七）年には父親の死去によって、家業の呉服商を相続することになりました。そして、同三十八（一九〇五）年に朝鮮の大邱に始めての呉服支店を出し、続いて普州にも出店しました。四十四年には本店を現在のソウルに移し、以後元山、釜山、平壌に支店を出し、京都市内に仕入店を開設しました。さらに大正十一（一九二二）年に組織を資本金二〇〇万円の株式会社三中井呉服店に改め、勝治郎は社長に就任しています。その後も、三中井の本部を置いた南五個荘村の村会議員や村長を勤めながら、日本国内に東京支店や大垣支店を開きました。

北米商業視察と排日の実見

大正十三（一九二四）年、株式会社三中井呉服店の社長であり、同時に南五個荘村の村長でもあった勝治郎は、弟富十郎の竹馬の友であり米国留学の経験のある貿易商、小泉精三に出逢い同人の渡米に同行を依頼し、承諾を得ました。その後、勝治郎と同年配の神崎郡山本出身で大阪の呉服商、小泉重助も同行者に加わることになりました。三人を乗せた二万一〇〇〇トンのウィルソン号は、六月十日に神戸港を出港しました。

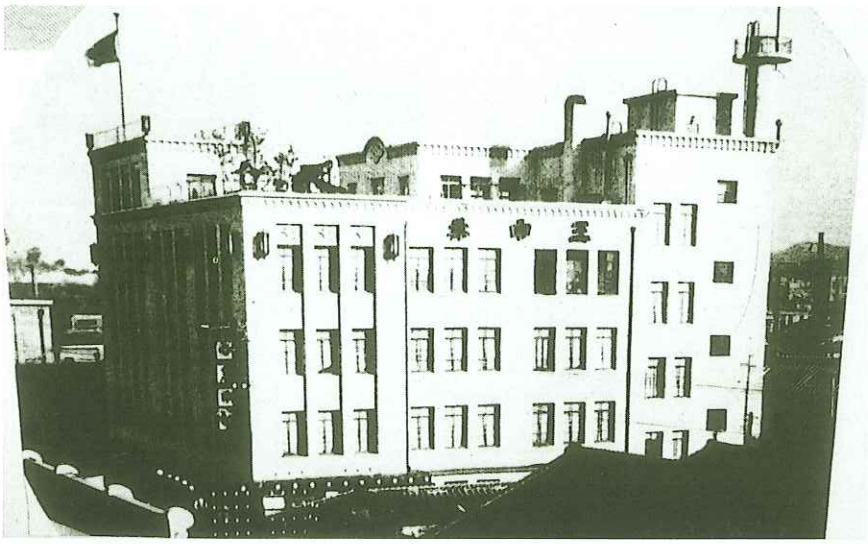
勝治郎はこの視察において、日々の日課や見聞を克明に記入した旅日記を付けています。まず、出港の十日の日記には、洋行の目的が先進国の実状を視察して、三中井だけでなく日本商業界の発展に寄与することにあることが、高々と宣言されています。五十二歳になり、社長と村長を兼務する身でありながら、なお若々しい情熱を持った人柄でした。

歴訪した都市は、ホノルル、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ソルトレークシティ、シカゴ、デトロイト、ボストン、ニューヨーク、ワシントン、オートホース、メキシコシティ、エルパソ、シアトル、バンクーバーなどです。八月三十日、大阪商船のアラバマ丸に乗って、カナダのビクトリアを経て、九月十五日に横浜に帰港しました。翌日列車で京都に着き、さっそく近親者を集めて渡米報告を三日間に渡って開き、アメリカ視察にもとづいて三中井呉服店から百貨店への転換を力説したそうです。この後の、三中井の経営戦略と深い関係のあるもう一つのアメリカ見聞談は、アメリカにおける激しい日本人移民排斥（排日）を踏まえて、海外発展に関する所見が述べられていることです。勝治郎は、排日の大きな原因の一つは、米国人と日本人移民の生活水準の落差か

ら来るものであり、低い生活水準に甘んじながら浸透を図る日本人移民に対して、米国人が将来の生活に不安と恐怖を抱いているところにあると指摘しています。海外発展のためには、政府が貿易商を政府公認の商人として全面的に保護し、肉体労働者の渡米だけでなく、資産のある商人の渡米を促す必要があると主張しているのです。

官民一体による海外発展の主張であり、後の三中井家が政商的な路線を歩むことになるのは、一つには勝治郎が渡米中に国家の保護から捨てられたような、日本人移民の状態を実見したことに原因があるといってもよいでしょう。この旅行は三中井の朝鮮・中国への伸展に一層拍車をかけることになりました。

明治38年に開店した大邱の三中井百貨店



■三中井の組織と経営

勝治郎がアメリカから帰国した後の三中井の発展をたどってみましょう。三中井呉服店を昭和八（一九三三）年に、株式会社三中井百貨店と改称して百貨店としての陣容を整え、満州事変後の「新京」（現長春）に大店舗を完成しました。三中井自身が発行した昭和十三（一九三八）年の『三中井要覧』によれば、その組織は次のように朝鮮から中国に飛躍的に拡大したことがわかります。三中井百貨店の資本金は八二〇万円、本部は滋賀県神崎郡南五個荘村金堂に置かれ、本社は京都市仏光寺通室町にあり、仕入部として京都・大阪・東京に支店がありました。

現在のソウルの本店には、商事部・洋服工場・クリーニング部が所属し、支店が釜山・大邱・平壌・咸興・元山・郡山・木浦・大田・光州・清津・興南・普州に展開し、鉄筋コンクリート三～六階建ての地方デパートと称してもよい外見を持っていました。同年設立された系列会社、東亜三中井と三公商会の支店も中国大陸の各地に配置されていました。

昭和十（一九三五）年の朝鮮・中国における本支店の従業員数は、男子店員の合計五四四人、女子店員は四三六人、工場従業員は一二一六人、総計二一九六人に上っています。これらの三中井の男子店員は、商業報国の使命を担っているという意味で商戦士と呼ばれ、その等級は陸軍の階級にならって、下は二等兵から上は元帥の間に分けられていました。とくに満二三歳までの店員は、勤労青年を対象に軍事訓練を中心とする教育施設である、青年訓練所に入所することが義務づけられていました。この様に三中井の店員組織には、時勢を反映した軍隊色が濃厚であったことは事実ですが、滋賀県出身者の多かったこと、採用者は訓練後に配属を決定され、丁稚時代の仕事の役割や店内起居の様子、在所登り制度的な定期休暇など、近江商人らしい要素もなお明瞭に残っていました。

朝鮮半島から満州にかけて、支店設置を倍増した三中井の営業成績は、ほぼ順調に推移しました。しかし三中井は、国策としての植民地朝鮮の戦時体制化と中国侵攻政策を推進する、国家機関の長である軍部の要人と密接な交流を保ちながら営業拠点を拡大していったので、昭和二十（一九四五）年の敗戦と同時に一挙に消滅し、幻の近江商人となってしまったのです。同じように海を渡った大陸での活動とはいえ、朝鮮・中国大陸における三中井は、勝治郎が訪米時に身をもって実感した、排斥に苦しむ北米移民とは正反対の立場にあったといえます。そこに、近代日本の国際関係を如実にみることができます。

（付記　本来、原音を付すべき朝鮮・中国における一般の地名の表記に際し、当時の慣用的呼称に従ったのは、たんに原音付記による煩雑さを避けるためです。）

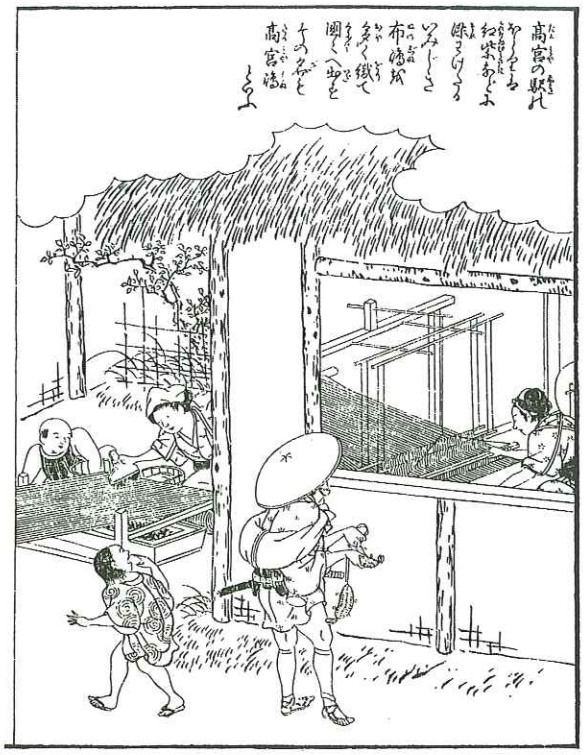
上記の写真はまちかど美術館期間中に一般公開された中江家での小幡人形などの展示の模様。

大正館開館にむけて

本年九月二十一日には、大陸で活躍した中江家の邸宅が一般に公開されることとなっており、五個荘町では現在公開にむけて中江家邸宅の整備が進められている。

近江商人の
ベンチャービジネス

積極的に技術改良を重ねた
近江麻布



『近江名所図会』に描かれている高宮宿の「布忽」の店先

近江麻布は近江商人の代表的な持ち下り商品で、麻布の行商から身を興して大成していった商人は少なくない。五個荘の外村与左衛門、塚本助左衛門、松居久左衛門、山中利右衛門などがあげられ、伊藤忠兵衛も麻布の行商からはじめた。近江麻布の歴史はすなわち、近江商人の歴史ともいえるぐらいに、近江商人の扱い商品として代表的なものであった。

多くの近江商人が麻布を持ち下り、青苧を登せ荷として扱った。近江商人によって全国に広まった「高宮布」は湖東地方で多く生産されていたが、地場産業として興隆させたのは五個荘の中村治兵衛であった。治兵衛は農家の内職として製織技術を指導し、農間余業として地域に定着させ、同時に製品の販売もはじめた。麻布を関東に持ち下り、原料を仕入れ販売に従事したことで、顧客のニーズを製品に反映させて、一層の質的向上をはかった。天明年間（一七八一～一七八七）には、近江では絣の技術が進み、彦根藩は麻布改役所を設けて不良品の販売を禁じ、藩の国産政策を進行したことも近江麻布の名声を高める大きな要因であった。

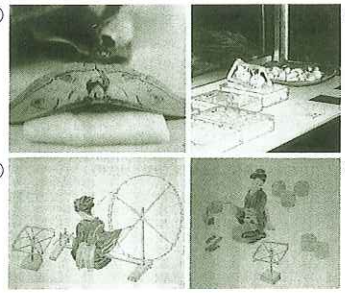
技術開発が著しく進むのは江戸時代後半で、嘉永三年（一八五〇）ごろには絞絣が考案され、板締絣を利用して近江上布が生産された。

藩の統制がきびしい越中・越前で麻織の生産の定着に困難をしていたのに引換え、近江では縮（ちぢみ）や絣（かすり）の製法の開発が進み、幕末に活躍をはじめた湖東商人の恰好の扱い商品となっていった。

能登川「布市」の阿部一郎兵衛は「阿部絣」を草案し、紅染を加えて新機軸を打ち出した。さらに高宮の郡田新蔵は、大和絣の技法を習得して帰り、板締絣を発明した。この技法は当時人気のあった拈（ひねり）絣の生産の効率化に大きく寄与した。拈絣は10反織るのに20人の手間がかかったが、板締絣では10反を1人で生産できるのであった。この板は現在も秦荘町の金剛苑に保存されている。

化学繊維の登場と生活様式の変化で麻織物の用途が大きく変わってきたが、近江の麻織物は、現在も伝統を残しながら近代設備を整えて寝具を中心としてその生産を高めている。先人のあくなき技術へのこだわりが踏襲されているのである。

当時の家内工業



①蚕。右奥が自然のもので緑色をしている。
②蚕の成虫
③蚕から糸をとって、糸車に巻きつける。

④板締め絣用の道具。板に経糸をかけて、上下から万力で締め付けると、すき間から色が入りこみ、板ではさまれているところが白いままになる。

近江商人関係書籍紹介

『近代近江商人経営史論』（有斐閣、1997年、450頁、7500円＋税）

十八～二十歳で、一本の天秤棒を担ぎ、身一つで全国行商の旅に出たところに近江商人の原点があります。本書は、この様な近江商人に深い愛着を寄せる著者の、これまでの業績の集大成といえます。

本書の内容案内を兼ねて、主な特徴を挙げてみましょう。第一の特徴は、江頭恒治著『近江商人中井家の研究』、宮本又次著『小野組の研究』が発刊されて以来、実に30年振りに出版された近江商人研究の学術書であること。第二に、時代を越えた近江商人の多彩な活動の特徴を、広域志向性という言葉で表現し、現代の日本経済のあり方の先駆的活動ととらえていること。第三に、代表的な近江商人をとりあげ、何歳頃からどんな商売を始めたのか、どんな心構えをもっていたのかといった創業期を比較したり、三中井（みなかい）のような大陸に発展した、新しいタイプの近江商人も取り上げていること。そして、経営手法の限界やその転換など、近代の近江商人の経営の実態をより詳しく解き明かす内容になっていることです。

新近江商人考『近江商人の商法と理念』（発行／滋賀県AKINDO委員会）

AKINDO委員会では、このたび、近江商人の概要とその商法やその商法を支えた経営理念、文化、生活等を豊富な写真を使って分かり易く解説した『近江商人の商法と理念』を発行しました。

「近江商人」の進取の気性やチャレンジ精神、国際性豊かな経営センスといった資質は、この混迷の時代に多くの方々から改めて注目されています。

こうした「近江商人」の「知恵」や「業績」を多くの方に知っていただき、その「近江商人」を生み育んだ近江の地、滋賀県に誇りを持つきっかけに少しでもなればと考えております。

ご希望の方は、送料として270円分の郵便切手を同封のうえ、「近江商人の商法と理念」希望と書いて、住所、氏名、連絡先の電話番号を明記し、左記までお申し込み下さい。

■申込先
〒520 大津市京町四丁目1－1
滋賀県庁商工労働会館内
AKINDO委員会事務局
電話0775（23）4641
FAX0775（28）4877

近江商人の金言名句⑦

押込隠居（おしこめいんきょ）

小林吟右衛門掛け軸

御先祖よりの御掟を破り不埒不法之沙汰有之者、
主人たり共その所持品並手廻りに至る迄取り上げ之上
諸親類後見之者立会之上隠居可申付事
湖東　小林吟右衛門の「示合之条目」より

たとえ主人たりといえども、主人として相応しくない人物であれば、親類や別家立ち会いのうえで、その座を追放する。実際には、こうしたケースは多くはなかったといわれているが、日野の中井家や近江八幡の西川家でも、家業にあまり身を入れない主人に対して、親類・別家は強い責任感をもって意見し、隠居させた事例が知られている。「店中一統協議」や「衆評」に見られる合議制による意思決定方式の採用も、主人や支配人による独断を制限したものである。

押込隠居は、長男が本来家督を継ぐのが常識とされた時代、その者が不肖の子であれば、肉親の情に溺れず、経営の上層部の役員が諭し、それでも改めなければ協議のうえ、その相続権をはく奪することも明記している。

社内の派閥抗争や、社外から企業論理を逸脱した醜聞にまつわる経営責任を問われ、トップの交替劇が演じられることの少なくない今日、押込隠居は、経営組織として自浄能力を備えることの大切さ、また、トップが心すべきは、その引き際であることを教えていないであろうか。

第7号
■編集・発行／AKINDO会議　大津市京町四丁目一一
AKINDO委員会内　TEL〇七七五（二三）四六四一

近江商人発祥の地を巡る
スタンプラリー開催

7月15日～11月16日

滋賀県内の近江商人関係資料館にスタンプ台を設置

AKINDO委員会では滋賀県内の近江商人関係資料館のご協力を得て、スタンプラリーを計画しました。「近江商人」の足跡にふれていただき、近江商人への理解を深めていただける一助となることを期待しています。

スタンプ帳は左記の近江商人関係資料館にてお渡ししており、近江商人関係資料館に設置されたスタンプを4か所以上押して頂くと各資料館にて賞品と引換えいたします。詳しくはAKINDO委員会までお問い合わせください。

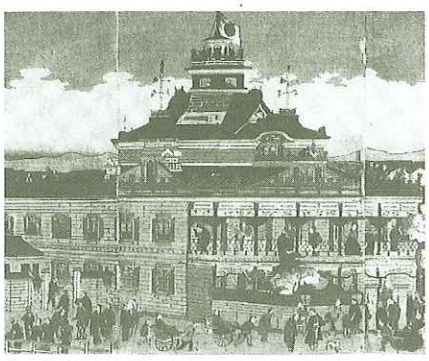
■問合せ先
TEL 0775（23）4641

スタンプ台設置資料館

近江日野商人館（日野町）、近江八幡市立資料館・旧西川邸（近江八幡市）、五個荘町近江商人博物館・近江商人屋敷・五個荘町歴史民俗資料館（五個荘町）、近江商人郷土館（湖東町）、豊会館（豊郷町）

近江商人郷土館第10回特別展
「明治の近江商人」開催中

平成9年5月20日～11月30日



江戸時代に活躍した近江商人は、明治にはいると時勢に取り残されたかのように誤認されてきましたが、松方デフレにより家業の行き詰まりを感じた商人たちは、初めて自主的に局面打開に取り組みました。わが国の企業勃興は、商人たちの資力と行動をバネにしたのです。この時代に新しい企業経営に携わった近江商人の姿に光りをあてる特別展を企画しました。多数のご来館をお待ちしております。

財団法人　近江商人郷土館
滋賀県愛知郡湖東町小田苅473
TEL 0749－45－0002
（月曜休館）

AKINDO委員会ホームページが更新されます。

新メニューに『近江商人の生活と文化』がプラス！

昨年オープンしたAKINDO委員会のホームページが、7月に更新されます。新メニュー項目に『近江商人の生活と文化』を加え、「近江商人の仕事場（結界と帳場）」や「近江商人の衣装」「近江商人の食事」をビジュアルでわかりやすく表現しています。また、情報誌「三方よし」の内容を詳しく掲載し、年3回の発行と合わせ更新していきます。さらに充実したAKINDO委員会ホームページをご覧下さい。

［URL http://www.biwa.or.jp/~akindo/］

てんびん棒

滋賀県は、姉妹都市提携率が全国でもトップクラスであるという。市町村レベルでは、全国で5位の42・0％の市町村が姉妹都市提携を実施しており、町村レベルでは全国2位の32・6％、そして市のレベルでは滋賀県内全ての市が姉妹都市提携をしており、山梨県、鳥取県、香川県と並んでいる。

滋賀県が姉妹都市提携を行っている都市とは、近江商人の発祥地と出掛けた土地という関係から友好関係を結んでいる例も少なくはない。両浜商人の発祥地である能登川町や近江八幡市は、両浜商人が活躍した北海道の江差や松前町と姉妹提携を結んでおり、両市とも活発な交流が展開されている。そして、江差町や松前町は、近江商人の活躍こそが我がまちの経済基盤を築いたと言い切っている。

この松前町と江差町の間に上ノ国という町があるが、本年、安土町との間で正式に姉妹都市提携がおこなわれた。一方、蒲生氏郷の縁で日野町と松阪市は文化交流都市提携を行っているが、松阪の青年商工業者の団体が、頻繁に来県している。かつての絆が新しい時代の新しい交流へと発展することは、大きな意義のあることではなかろうか。